



津村文彦『東北タイにおける精霊と呪術
師の人類学』めこん、2015、309p.

「わからない」。本書の主題はこの一語につきる。あわてて読むと誤解を招きそうだが、本書の内容がわからないのではない。われわれの日常はじつに「わからない」、すなわち腑に落ちないとか常識的には捉えがたいといった出来事に取り囲まれており、にもかかわらずわれわれはそれを現実として受け入れ、日々暮らしている。それはいったいどのような事態であるのか、というのが著者の問いの核心である。ただしこの問いは抽象的に発せられるのではなく、あくまでも精霊ピーを中心に据え、「ピーや呪術などの『わからなさ』に充ち満ちた事象を、人びとがいかにして受容可能なものへと変換し、それによって彼ら自身が日常生活の『現実』をいかに捉えているか」(p.12)を明らかにすることが本書の目的である。

タイ社会においてピーは、死者の霊や守護霊、自然環境に遍在する霊、祟りをなす悪霊など、きわめて多くの機会に言及される代表的な霊的存在である。それでは卑近な存在で知り尽くされているかという、不可視の存在で確証がもてない。そこで「わからない、でも怖い」(p.11)という感覚的判断のみがせりあがったような態度が典型的な反応としてみられることになる。このような存在自体に対する不確信を残したままピーを受容可能なものとして変換し、現実世界に配置するためのしくみが呪術である。本書のタイトルに精霊とともに呪術が並置されているのはそのためである。

理論的背景として、「現実の社会的構成」に関する知識社会学(バーガー・ルックマン、マンハイムほか)が援用される。ピーにまつわるさまざまな出来事は、「日常」をはるかに逸脱した「非日常」ではなく、日常のなかの異常やふとした「わからなさ」である。これを含みこんでいかに日常の「現実」が成り立っているかに著者は目を向ける。しかも「現実」は一枚岩ではないから、「個々の主体の多様な知識と経験にもとづきながら、〈不調和な

共受容〉をいう状況のなかで、いかにして生成されるかを問題化する」(p.18)。ここでいう〈不調和な共受容〉とは、「一見相容れないように見える複数の理解を同時に受け容れる状況」(p.17)として規定されているが、この概念は本文の濃密な民族誌記述から徐々に立ちあがってくる。

全体は三部構成であり、上述の序論(第1章)のあと、精霊についての語りと実践の記述の前に、映像メディアを中心とするタイのポピュラー・カルチャーにいかん精霊の観念が浸透しているかを明らかにするのが第1部「物語に表象される精霊」である。第2章「ナーン・ナークの語るもの」では、実話にもとづく有名な口頭伝承を下敷きにした大ヒット映画『ナーン・ナーク』(ノンシー・ニミブット監督、1999年)の物語の背景にせまる。そこには、精霊に関する語りが仏教に吸収され、仏教を支柱としてタイが近代国家編成を果たしてきた過程と同時に、仏教に取り込まれながらも民衆生活の基底部に息づくピー信仰の実態がうきばりにされる。そして第3章「ピーポーブの語るもの」では、悪霊ピーポーブを題材とした映画をとりあげている。1990年代の「ピーポーブもの」は、伝統村落の外部から訪れた者が精霊の仕業を目の当たりにすることから生じるドタバタを描くコミカルなものであったが、2000年代以降は傾向が変質しつつあり、当事者たちが疑念や逡巡を深めていくにつれて真実性自体もますますあやふやになっていく恐怖が描かれるようになってきた。ここには、中央と地方といったわかりやすい他者性の対比から、東北タイ内部に生じる新たな他者化への転換が読みとれ、ピーの出現する空間が無限に増殖すること自体が恐怖として扱われるようになったことがわかる。

第2部「精霊とともに生きる人びと」では、まず第4章で本書の主要フィールドである東北タイのコーンケン県DY区に位置するNK村が紹介される。乗り合いトラックとバイクタクシーを乗り継いで30分強で県の中心部に達する典型的な都市近郊農村といっても伝統的牧歌的な農村生活一色ではなく、都市化・近代化による急激な変化を被っていることが特徴である。このことは精霊や呪術に関する伝承知識が、1999～2001年、さらに

は補充調査の期間も含めると2010年にかけての民族誌的現在の経験とつながっていることを示している。第5章「善霊と悪霊のはざま」では、村落守護霊をめぐるアクターの立場のちがいが、ピー自体の善悪の意義づけも可変的であることが論じられる。村落守護霊の祠守チャムと、仏法の力により精霊を統御するモータムは競合的・対立的な関係にたちながら互いに異なる宗教サービスを提供する。ただし善悪の観念は常に固定化されるわけではなく、モータムのもつ仏教的規範と異なる村落共同体のもつ規範が優先されることもある。仏教的規範と共同体規範の村落内における相克が「双方のあいだで消極的な均衡を保ちながら、守護霊は完全に『悪霊』化することなく、『善霊』の立場が保持され続ける」(p.139)という側面に、本書の主題である不調和なまま両者が共に受け容れられる様相が如実にあらわれている。つづいて第6章「ピーの語りが伝えるもの」では、なぜ生活上の種々のトラブルや不調、解明されない疑問などがピーを引き合いに出して語られるのかという問いが主題化される。フィールドで頻繁に耳にするいわゆる「他愛もないピーの語り」には、語り手やその情報源である人物の直接経験にもとづく「極端な経験主義」という特徴がある。もともととなる経験においてピーの姿形はハッキリと視覚化されるわけでもなく造形情報を欠いたものであるが、同時に「わからない」からこそピーの話は人々の関心を引き、その意識の奥深くに刻み込まれる。「『理解不能性』こそがピーの居場所」(p.163)なのである。個々の情報が集積した版木の寄せ集めモデルはピー概念を補強もすれば、社会的リアリティの拠り所ともなる。

第3部「精霊を統御する呪術師たち」は、精霊の祓除をはじめとするさまざまな交渉的關係をもつ呪術師の側から、精霊の世界を社会的現実へ変換する過程が描き出される。第7章「悪霊を可視化する技法」は仏法の力によって精霊を統御するモータムの知識形成と実践過程について焦点をあてる。著者自身が高名なモータムT氏に弟子入りしモータムとしての修行をおこなった経験にもとづいて、モータムの力の源泉とその精霊への作用の仕方を追究している。呪文の習得、儀礼、タブー

の遵守などのさまざまな実践を通して、クライアントであるふつうの人々には不可視で不可知な存在であるピーの存在と所業を可視的にあつづけ、ピーのいる日常生活のリアリティを構築するのがモータムの役目である。それに対して、薬草による医療実践にたずさわるモヤーとよばれる薬草師に焦点をあて、「近代医学」「伝統医学」「土着医学」の三者が混淆する状況进行分析するのが第8章「近代医療をまとった薬草師たち」である。タイ民間医療史における「土着の知恵」の再評価という傾向が1990年代以降に顕著になってきたこととあいまって、薬草の使用もこの混淆の状況に応じて多様性を持ち、呪術的な土着医学を排除しながら近代医学と親和性の高い伝統医学の部分が強調されたり、伝統医学の効能の説明として近代医学が援用されたり、さらに近代医学と伝統医学が土着医学と混じりながら実践されたりするなど、さまざまである。ここにも複数知識間の「不調和な共受容」がみられる。第9章「呪術師の確信と葛藤」では、これら知識専門家であり治療実践者でもあるモーがもつ知識と技術や、それによって現出させるリアリティも一様ではないことから、モーをいくつかのタイプとして論じている。呪術的リアリティの前提となる仏法にもとづく知識に確信的自信をもった「不問」の呪術師モータム(7章)、多元的な知識体系をオーバーラップさせながら用い、自己の知識の正当性を「納得」にまでもっていくモヤー(8章)に対し、本章で新たに検討されるモーパオという呪術師は、呪文や聖水を吹きかけることによって典型的には蛇毒治療をおこなう。仏教の知識に依拠するというよりもむしろ吹きかけ行為そのものに重きが置かれており、また薬草のように近代医学によって効能が確認されるわけでもない。みずからも「わからない、でも治るのだ」と表現してしまうほどに「葛藤」の呪術師なのである。

以上の議論をふまえて 最終章の第10章では、「不調和な共受容」という本書全体を貫くキーコンセプトから「結論」がのべられる。「2つ以上の異なった論理や説明が必ずしも調和されたり統合されたりすることはなく、ともに並列的に存在して受け容れられる状況」(p.281)は、東北タイの精

霊観や呪術実践の特徴を端的に示している。「不調和な共受容」を可能にしているのは、「わからない、でも恐い」や「……、でも治る」といった不理解や半信半疑を含みこんだ相互了解であり、わからないものをわからないままにしておいても生活は継続していくという日常の持続力でもある。

各章の内容をごくざわりだけ紹介するのみでは書評の役割を果たさないかもしれないが、10章1節には著者自身によって全体が簡潔にまとめられているし、先行する書評にも詳しい要約が記されているので、それらに譲ることとし、ここでは論点を3つほど提示しておきたい。ひとつは本書の中心概念である「不調和な共受容」についてである。知識の社会的配分の議論を下敷きにすれば、この概念は多様な人びとの解釈がせめぎ合い競合しながらもゆるやかに合意する見解が形成されながら知識過程が進行する状態といえる。現代世界における精霊観と呪術実践を焦点化する際、科学や医療、技術、宗教、法などさまざまな知識システムとの競合や並存などが常に議論となるという観点からも、また近年の東南アジア研究において主題化される「複ゲーム状況」[杉島 2014]（じっさい著者もこの論集にピー信仰をめぐる複ゲーム状況の論文を寄せている）などとも共鳴関係をもっていることから、この概念の有効性が確認できる。この〈不調和な共受容〉は、ある一人の中においても生じる局面として考えるとさらに興味深いのではないだろうか。たとえばある人が、あるときには科学的解決に完全に依拠しているようにふるまいながら、別の場面では呪術を信頼しきって言動する状況などへも切り込んでいけるような視角となれば、この概念はさらに強力なツールとなりうるであろう。

二点目として、本書の構成の特徴をあげておきたい。通常、インテンシブ・フィールドワークの成果をモノグラフとしてまとめる際、4章のようなフィールド概観が冒頭にきてしかるべきところ、本書ではメディア論から議論を起こしていることは評価の分かれるところかもしれないが、少なくとも評者にとっては新鮮であった。それはごく一般的に、ピーの観念を受容するタイの人々の精神風土を前提として描き出す、あるいは著者自身の

ことばにしたがえば第2部以下の民族誌記述の「歴史的社会的背景を示すため」(p.275)といった以上の効果をもたらす。たとえば5章の仏教と在来信仰との共受容の議論や、複数の医療体系が並存するなかで外来と土着が混淆していく様態を描く8章などとも連動している。もう一点、著者自身がタイの民衆文化に深くとりこまれていることをも示しているよう。

第三点として、個としての呪術師への着目に注目したい。とりわけ、8章でモー（知識専門家）の人物像にふれているあたりはきわめて興味深い。すなわち好奇心が旺盛で、物覚えが早く、観察力にすぐれ、新たな知識を取り込んで拡張させていくことに楽しみを覚えるような「頭の良さ」をもった人物、といった記述である。この人物としての呪術師への関心が、次の9章への問題意識としてつながっていく。その類型化は「不問」と「納得」だけでは固定化してしまうきらいもあるが、そこに第三の「葛藤」という類型化しきれない呪術師のすがたを指摘することにより、呪術師のもつ揺らぎ含みのポテンシャルもほのめかされているというのは深読みが過ぎるであろうか。少なくとも、人となりの幅をもった記述は、今後の精霊研究、呪術研究の展開を予感させる。

(川田牧人・成城大学文芸学部)

参照文献

杉島敬志（編）. 2014. 『複ゲーム状況の人類学』
東京：風響社.

矢野秀武. 『国家と上座仏教——タイの政
教関係』北海道大学出版会, 2017, 418p.

本書は、近現代タイにおける政治と宗教、とりわけ国家と上座仏教の関係について、行政事業、公教育、憲法規定、学術研究といった多様な領域にわたり、宗教研究の視点から論じたものである。

タイに行くと、公共的な空間に仏教が深く浸透していることに気づくだろう。出家者の優先席が設けられているバス、安居中（出家者の精進期間）の飲酒を控えるように促す巨大な看板、小学校の